

保育記録による園内研修と保育への振り返り  
— 選抜研修がもたらす保育者の変容と園内への学びの広がり —

Training by Episode Recording and its Reflecting on Early Childhood Practice  
in On-site Meeting

橋 川 喜美代\*  
HASHIKAWA Kimiyo

本研究は、幼稚園教諭と保育所保育士合同の交流研修において実施した選抜研修が保育者個人や園内の保育にもたらす影響について解明するものである。合同の交流研修を通して指導したラーニング・ストーリーによる記録の採集は保育者に、子どもが熱中・挑戦する姿とそれを支援する保育者の関わり方を省察させ、子どもへの共感的まなざしをもたらした。選抜研修で採集した保育記録に基づいた園内研修を通して、幼稚園教諭のみならず、保育所保育士たちは①保育者のかかわりと子どもの活動の一連の流れ、その過程における成果をつぶさに採取することの必要性、②保育者間の学び合いが子ども理解の共有と保育の質を保証する保育者の成長を生み出す契機となることの認識、を園内に広げた。

This paper clarifies the impact of selective workshops on nursery and kindergarten teachers and on-site meeting by way of joint interactive training between kindergarten teachers and nursery teachers.

Through said joint interactive training, we have examined the relationship between the children, who are eager to grow and to challenge themselves, and the nursery and kindergarten teachers who support them, and also collecting recordings of Learning Stories. The goal is a shared sense of the learning process with the children.

Through on-site meeting based on episode records derived from selective workshops, not only kindergarten teachers but also nursery teachers were made more aware of: 1) the flow of the integrated nature of the relationship between nursery and kindergarten teachers and children and the need to diligently derive results from this process, and 2) the fact that the mutual learning between nursery and kindergarten teachers engenders opportunities for growth of nursery and kindergarten teachers as well as shared understanding of children and the quality of early childhood education. Ultimately these concepts are also popularized on-site.

キーワード：園内研修，ラーニング・ストーリー，保育の振り返り

Key words : on-site meeting, Learning Story, reflecting on early childhood practice

はじめに

子ども・子育て新制度が平成27年度からスタートし、認定こども園が増加する中、幼稚園教諭、保育所保育士、認定こども園保育教諭が自らの保育を振り返り、自己点検・自己評価し、園内研修の充実を図り、子どもや保護者、社会の要求に応えることは急務となった<sup>1)</sup>。各市町村教育委員会では、幼保連携型認定こども園への移行に際し、幼稚園教諭、保育所保育士間の協働体制確立に向け、さまざまな交流が図られている。

筆者が関わった兵庫県三木市では、平成28年4月からの認定こども園開設に先立ち、2年間の交流研修会を重ねてきた。平成26年度は公立幼稚園4園及び民間保育園3園、計7園の協力のもと、公立・民間の幼稚園・保育園の教育・保育内容について、それぞれの良さを学び合いながら、相互の職場に対する共通理解を深め、保育者

としての質を高めるために、市内の幼稚園教諭及び保育士全員が一人2回の交流研修を受けた。交流実施園7園は公開保育を8～9回行い、1回につき14～20名の保育者が参加し、計57回の研修を実施した。公立幼稚園での交流は、保育士が集団遊びにおける幼児理解を深めることにねらいを置いた。一方、民間保育園での交流では、幼稚園教諭による乳児保育の理解をねらいとした。

初年度の交流前半では、公立幼稚園での幼児理解は抽出児のエピソードを記録する方法で実施する予定であった。しかし、多くの保育士が抽出児の活動をつぶさに観察しようとして移動したり、言葉を採用しようと接近することで、子どもが萎縮するといった事態を招くことになった。そこで後半の交流ではこうした事態を回避するため、ラーニング・ストーリーの「学びの構え」である①関心を持つ、②熱中する、③挑戦する：困難ややったことの

\*兵庫教育大学大学院人間教育専攻幼年教育・発達支援コース 教授

平成28年4月25日受理

ないことに立ち向かう、④考えや感情を表現しようとする、⑤自ら責任を担う、という5つの視点を定め、まず保育者がどのような子どもの姿に注目したのかを明確化し観察することに移行した<sup>2)</sup>。ラーニング・ストーリーは大宮や鈴木らによって保育の質担保の観点から注目され、園内研修にも導入されてきた<sup>3)</sup>。

こうした初年度の交流研修会は異なる保育現場での保育の様子を知る機会にはなかったが、自分が担当している学年の観察・参加ではないことから、保育に生かしくいといった感想がでてきた。また、交流実施園では、研修会実施による子どもや職員の負担が問題となった。そこで平成27年度では、公立幼稚園・公立保育所10園及び民間保育園10園、計20園の協力により、幼保・公民の枠を超えて、保育者がより良い教育・保育を主体的に学ぼうとする意識を高める研修に移行させることとした。特に、前年度との違いは選抜研修を実施したことである。20園の内4園で実施した選抜研修では、内面の読み取りへと移行させ、幼保の枠を超えた子どもの育ち・学びを共有する機会となることを目指した。そこで、各園から2名の保育者が参加し、採取した保育記録をもとに園内研修を実施し、市の就学前教育・保育課に報告書の提出を義務づけた。特に、報告書では保育者による子どもの育ち・学びの共有を契機に、園内の保育者間の子ども観や保育観への振り返りをねらいとし、①学んだこと、②感想、③今後の教育・保育に活かす方法、という3点からまとめてもらった。

園内研修の義務化は、佐伯が指摘するように「同じ実践でも、見る観点が違ふと、まるで『別の話』になるものである。ここでいう『見る観点』というのは、見る人の価値観（「大切だと思っていること」）や、視野の大きさ（『鳥瞰図的視野』か『顕微鏡的視野』か）、背景知識（当該の事象に関わる過去の歴史や他のこととの関連性についての知識）などを指す。このような『見る観点』の違いは、具体的な実践をめぐって話し合っはじめて明らかになるものであり、それらについて話し合うことは、独りよがりな見方を反省し、実践をさまざまな観点から吟味する柔軟性と多様性<sup>4)</sup>を育むことにねらいがあった。

本研究は、平成27年度に実施した選抜研修における観察記録をもとにした園内研修の取り組みを分析することを目的とする。分析の観点は他園で採取した観察記録をもとにした子どもの育ち・学びの共有が自らの保育への振り返りや子ども理解の共有にどのような影響をもたらしたのかを明らかにすることにある。

## 1. 幼稚園教諭による子どもの育ち・学びの共有

2年目の交流研修では幼稚園教諭、保育所保育士の意識を幼保の違いの認識から、目の前の子どもの観方へと

移行させた。ここでは、公立保育所で開催された選抜研修に参加した公立幼稚園のS教諭とU教諭2人の2年間の記録から、保育者の個々人の変容と園内研修における学びの広がりを順に明らかにしたい。

### (1) 選抜研修における公立幼稚園S・U教諭個々人の変容

S教諭が昨年の民間保育園で採取した前半の記録には、印象に残った場面として、「0歳児の保育に参加させていただく。保育士がそっと抱くだけで安心して泣き止む。まずは保育士との信頼関係が大事。一人一人の発達に応じた言葉かけや支援」といった具合に箇条書きがなされている。乳児保育に参加して教師は改めて4、5歳児とは異なる子どもと保育者の関わりを認識し、身を委ね安心して抱かれる乳児の姿に目を留める。それゆえ、かわりがみられた場面として、「0歳児でまだ小さいので友達とのかかわりは少ない。だっこして～と泣いて訴え、抱かれると安心して泣き止む」と記しているだけである。

後半においては「保育士の言葉かけ」と題して、保育士の言葉に注目した記録を残している。ラーニング・ストーリーはポートフォリオ評価であり、保育士の援助と子どもの活動の過程、その過程における成果が離れがたく結びついているのだが、幼稚園教諭の目は子どもよりも保育士に注がれている。3歳児のリズム遊びで見た考えや感情表現に注目し、保育士の認め言葉が次への意欲に繋がったと記しているが、どのような子どもの動きに繋がったのかは記述されていない。

「リズムあそびでは、『〇〇ちゃん、元気に足があがってるね』などの他、友達のしているのを見ていた子に、『〇〇ちゃん、お友達のいいところ上手に見つけられたね』や、ちょっと苦手な子には、『前よりもタイミングがあってきたよ』など、いろいろな場面で認め言葉が入り、それがとても嬉しそうで、次の意欲に繋がっていた。友達のいいところを見つけられるようになり、次に友達同士の繋がりが深くなっていくような言葉かけを見せていただいた」。

U教諭は前半の印象に残った場面として、「1、2歳では一人一人の発達段階に応じて服を脱ぐときに手伝うところと出来るように見守るところに配慮がなされている。3、4、5歳ではプールを出た着替えの後、『ちょっと入れてあげてね～』という先生の声かけに自然にスペースを空ける2人。かまひすぎでお世話をしすぎるでもなく、自然な感じで受け入れているのが分かった。先生も代わりながら自然についておられる」と、保育士の着替えに対する年齢段階別の配慮に目を留めている。また、かわりが見られた場面として、「先生同士の連携が行き届いている」と感想を述べている。後半の記録では、おやつの前に着替えた2歳児A児の様子が綴られている。「スカートの下にはいたズボンが気になり、自分でまく

りあげる。スカートスタイルがいいのか、まくり上げておきたいのかは分からないが、何度も繰り返しまくり上げて気になっている様子。活動に対しても、ズボンが気になってこだわっているのか、みんなですることに興味が湧くまで時間がかかる子なのか、遊び始めは様子を見たり、「しない」と保育士の側に来たりしている。保育士も無理に入れる様子はなく、受け止められている。バルーン遊びも少しずつ表情がほぐれ、終盤には笑顔が沢山増え、声も出てきた。向こう側にいる子に向かって、「おねーちゃ〜ん！」と大きな声をかける」。記録の主体はA児だが、A児が関心を持ち、熱中している活動ではなく、気になる行動が記されているため、笑顔が増えてくる根拠がどこにあるのかわからない。

初年度では、S教諭もU教諭も未満児の発達課題の把握に不慣れなため、幼保の違いを保育士の姿から見出すとしている。これは初年度の幼稚園教諭の傾向としてやむを得ないのではないだろうか。しかし2年目のS教諭は記録において、同じ3歳児でもその子の行動の背景を探ろうとし、誰にも触らせようとしないうサギのお弁当箱に思いを巡らしている。幼保の教育・保育の違いよりも、目の前の子ども理解に焦点が向くようになった。

題名：大事なオレンジとレモン（3歳児）

自由遊びが始まり、両手にオレンジとレモンを握っているS児。とても大事にオレンジとレモンを持っている。流しのところでは「洗ってください」と友達に声をかける。コップの中に入れたらちょうど大きさが同じでなかなか抜けなくなる。やっと抜けたら小さなレモンを入れる。次はもう少し小さなコップに、今度はお皿に・・・最後はウサギのお弁当に入れる。

違うお弁当箱にパンを入れて「ハイどうぞ」と友達に。ウサギのお弁当箱は絶対に渡さない。時々、お弁当箱を振って音を出し入っているのを確かめる。ちょっと脇に置いて遊んでいるときに、女の子が触ろうとしたがすぐに気がつき、「コレはぼくの・・・」と言っている。

製作の声がかかり準備を始めるが、ウサギのお弁当箱は脇に挟んだままである。保育者が「〇〇先生にわたしたとこ」と声を掛け、先生に渡して安心して製作に取り掛かった。〇〇先生も大事に預かり、置いている。そうした様子から、S児にとってオレンジとレモンの入ったお弁当箱はとても大事なものだということがわかった。

S教諭は、オレンジとレモンが入ったウサギのお弁当箱がS児にはとても大事なものだとして理解した。そして、その判断は保育士の行動から見ても誤りがなかったと記している。この記録から、S教諭は子どもの心に寄り添い、大切にしようとする保育士の姿勢に共感して綴っており、子どもと保育士双方のかかわりに目を向けている。

続いて、2人目のU教諭の記録も見ておこう。この記録でU教諭は、A児・B児が切った紙を箱に入れる様子

に目を留め、その行動の違いを細かく記しながら保育士の支援を問題にする。

題名：どうやったら入るやろう・・・（3歳児）

ひまわりの種の製作。選んだ紙を早速切り始める。先生は扇風機が回っているから、切った紙を箱に入れるよう説明される。A児は1回切ったときに左手に近い方から切り始めたので長い方の紙が落ちてしまう。先生も「あ、落ちた」とだけ声かけ。その1回で誤りに気づき、左手に遠い方から切り始め、さらに切ったものが直接箱に入るようにする。

B児ははさみの使い方にあまり慣れていない様子で、上が少し残ったり、手でちぎったり、はさみを上から下にして切ろうとしたりしている。上を少し残して逆から切る方法を何度も繰り返している。うまく切れたときも表情は変わらず、集中して取り組んでいる。先生は切り方を見て、「ここもってごらん」「はさみおっきく広げてごらん」などと何度かかかわる。下から切り始めて、残った上の方を上から切ったとき、初めて箱に直接入った。声は出さなかったが、「入った♪」という満足気な表情をした。

切り方は危なっかしく、年齢に応じて安全に遊べるように保育士は声かけをしていた。その中でも、B児は自分なりに「箱の中に入れてたい」という目標に向け、何度も繰り返し試みている。それはA児の真似なのか、今までの経験なのかはわからなかった。

初年度のU教諭の記録は着脱の様子など養護面に着目しながら、前半はかなりおおよっぱに捉え、後半では表情の変化も交えながら細かく読み取ろうとしている。こうした変化への着眼は、2年目のA児・B児のはさみを使いこなす力や独創性の違いを捉える基盤となっている。

S教諭、U教諭とも、2年目のラーニング・ストーリーによる記録の採集によって、子どもが熱中・挑戦する姿とそれを支援する保育者の関わりをより詳細に省察することができるようになった。

では、選抜研修による子どもの育ち・学びの共有は自園や自らの保育の振り返りにどのような影響を及ぼしたのだろうか。

## (2) 園内研修における学びの広がり

選抜研修の記録に基づいた園内研修において、学んだ内容は①個に対する保育者の支援、②記録にみる子どもの解釈、③トラブルの原因把握と援助、④観察方法、という4つに分類された。U教諭が記録の説明において、観察していたB児が製作場面から自由遊びのままごとに移った時、テーブルに飛び乗りトラブルを起こしたことに加え、その原因ははさみの繰り返しによるストレスだったのではないかと話したことが研修の話し合いに強い影響を及ぼしたと考えられる。U教諭の子ども理解を深めるには、一連の行動を記録しておく必要があると語ったことは、表1の研修で学んだことの①から④すべての項目における記述内容に反映されている。

表1 選抜研修を踏まえた園内研修①

	特徴語	記述内容
学んだこと	個に対する保育者の支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>○3歳児の個の発達差に対する保育者の支援の仕方をどうするかを考え・接すること</li> <li>○年齢に関係なしに丁寧なかわりが大切である。</li> <li>○3歳児という年齢だからこそ保育者が行動だけでなく、心の動きも見なければいけない。</li> <li>○4人グループの中でも個人差が大きい。一人一人の発達段階や生活経験などを把握し、支援案を立て、職員の間で共通理解しておく必要がある。</li> <li>○一人一人の心に寄りそう大切さを改めて感じた。</li> <li>○理由はわからないが何かの物にこだわっていたS児は、物がそこにあるというだけで安心し、落ち着けるということを保育者がしっかり把握しておくということ。</li> <li>○3歳児でも自分なりに学ぼうとする力はある。</li> <li>○本人が心の拠り所として大切にしているもの（こだわっている物など）はその気持ちを教師が理解してかかわることで安定して生活していける。</li> </ul>
	記録に見る子どもの解釈	<ul style="list-style-type: none"> <li>○牛乳パックに種として切った紙を入れたいB児が、何度も繰り返し張り直し頑張る切ろうと熱中して取り組んでいる。</li> <li>○熱中し挑戦しているとらえたB児の製作の姿がその後の遊びの中で、実は違っていたのではないかとという別の視点での捉え方があるということ</li> <li>○はさみの個別指導を必要とするB児がA児の真似をして、ひまわりの種作り製作を何度も頑張った。それが自由遊びでのトラブルの原因ではないか。ハサミがしんどかったのでは？</li> </ul>
	トラブルの原因把握と援助	<ul style="list-style-type: none"> <li>○トラブルがあった時にはその場だけでなく前後の姿を見逃さず、原因を深く探ること</li> <li>○トラブルの原因が何だったかをしっかり探っていく事の必要性</li> <li>○3歳児で個人差があるので、同じ活動でも、ハードルが高いと後々のトラブルにつながっていく。トラブルには原因があるので、トラブルに至るまでの活動や行動を見返すと、次回の援助の仕方が手がかかりになる。</li> <li>○トラブルになる原因はどこからなのか、その場面だけを見て判断しない。</li> <li>○トラブルは目先のことでなく、その前の活動がどうだったか（友達関係やストレスなど）を含めて対処することが大切である。</li> </ul>
	観察方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>○幼児を見る時、ひとつの活動だけでなく、前後の流れも合わせて見るということ</li> <li>○幼児の遊びを観察する時、ポイントを押さえた見方をすることの大切さを改めて感じた。</li> </ul>

佐伯は、他者との話し合いの重要な意味は、「自分一人で自らの実践を振り返っていると、いつの間にか、『憶測』を『事実』とみなしてしまい、自分ではそのことにまったく気づかない」点を観察事実や推論過程を提示し、互いの話し合いを通してどういう対応が適切かを考え合うことにあると言う<sup>5)</sup>。この指摘とも受け取れる感想が表2の「保育者の支援」の中にある。

「まだ大人との関係の中で安心感を持っている3歳児だと思うが、保育者が離れるタイミングはとても大切だと思った。はさみの苦手だったB児にどんな認めの言葉をかければストレスにならず達成感で終われるのだろう。『できた！』という表情を見逃さず、保育者が一緒に喜んだり、周りの友達にも広めていったりするなどの支援で、B児の気持ちも変わったかもしれない。」「はさみの使い方について、個別に丁寧に対応することで、B児が牛乳パックに入れたい思いが、『なかなか入れられない』・・・ではなく、パックに入れることにも集中できたように感じた。」という言葉に示されている。つまり、適切な保育者の対応があればトラブルになることはなかつ

表2 選抜研修を踏まえた園内研修②

	特徴語	記述内容
感想	子ども観の確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>○報告を聞き、遊びの様子を想像することができたが、その時の表情や発した言葉の口調などはどうだったのだろうと思った。3歳児という世界の中で、どの年齢にもかかわらず、「育てたいこと」は同じで、「人とつながる力」なのではないかと思った。</li> <li>○3歳児は3歳児なりにいろいろ試しながら、活動していてすごいなと感じた。</li> <li>○2人の職員の報告の中に、「3歳児でも、こんなことができるんだ」とか、「3歳だから仕方がないのかな・・・」という言葉がありました。確かに発達段階をしっかりと把握することは大切ですが、3歳児であっても1人の人間として尊重し、「人とかかわり」（友達同士）を意識して教育していきたいと思いました。</li> </ul>
	研修の意味	<ul style="list-style-type: none"> <li>○関心、熱中、挑戦している姿を絞って観察した製作活動についての報告を聞かせて貰いました。実際研修に行くと勉強するのは勿論ですが、報告を受ける中で自分も考えることができました。</li> <li>○自分自身が関わっていると一歩引いた目で見えなかったりするもので、周りの人に見てもらうことも大事だと思った。</li> <li>○2人の職員が責任を持って研修に参加し、真剣に報告してくれました。良い研修ができたと思います。</li> </ul>
	保育者の支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>○まだ大人との関係の中で安心感を持っている3歳児だと思うが、保育者が離れるタイミングはとても大切だと思った。はさみの苦手だったB児にどんな認めの言葉をかければストレスにならず達成感で終われるのだろう。「できた！」という表情を見逃さず、保育者が一緒に喜んだり、周りの友達にも広めていったりするなどの支援で、B児の気持ちも変わったかもしれない。</li> <li>○できる事が限られてくる3歳児の中でも経験の差は大きいものと感じた。出来た時の嬉しさや出来ない時のもどかしさ、ぎこちなさ・・・その思いが達成感となるか、不快感となるか、声かけ一つ、関わり方で変わるのだと思った。</li> <li>○はさみの使い方について、個別に丁寧に対応することで、B児が牛乳パックに入れたい思いが、『なかなか入れられない』・・・ではなく、パックに入れることにも集中できたように感じた。</li> </ul>
	観察の重要性	<ul style="list-style-type: none"> <li>○どうして、この子はこんな方法で試しているのか。どうして、この子はレモンとオレンジのままごと道具をひとつも離さないのだろうかなど、子ども達の行動をしっかりと見つけ、微妙な心の変化に気づき共感したり、認めてあげたりすることが子どものさらなる意欲喚起につながるのだと思いました。</li> <li>○トラブルは単発で起きているように見えがちだが、前の活動や、その日一日の様子が繋がっているのだから、なぜトラブルが起きたのか考える前に一日の様子や、そこへ行くまでの様子をよく観察すると良いように感じた。</li> </ul>
子ども理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>○子どもが発信しているサインを観察してもらったり、振り返ることによって見つけられる事により、子どもを理解し、子どもとのつながりが深まっていくだろうと思った。</li> </ul>	

たのではないかとこの感想である。

園内の保育者間で保育を話し合う意味は、このようにどういう対応が適切かについて、その根拠を明確にしながらか解明していくことにある。「研修の意味」の中で幼稚園教諭が指摘しているように「自分自身が関わっていると一歩引いた目で見えなかったりするもので、周りの人に見てもらうことも大事だ」という点にある。それは言うまでもなく、鳥瞰図的視野と顕微鏡的視野という視野の大きさの違いを踏まえて、話し合うことである。

表3 選抜研修を踏まえた園内研修③

	特徴語	記述内容
今後の教育・保育に活かす方法	観察の視点	○保育者の見る視点で子ども達の姿のとらえ方が随分変わり、また教師間で課題を話し合えるポイントにもなっていく。課題を考えていく上で、やはり記録の採り方(視点をしっかり決めて)が大切である。 ○とにかく自分の頭・目・心を働かせ、幼児一人一人を見るということが大切だと思いました。
	記録の採り方	○4つの指標による記録の採り方は本園の園内研修でも活かしていきたい。 ○子どもの様子をよく観察し、トラブルの際はそのに至るまでの活動や様子にも注目してみる。
	子ども理解	○保育者中心ではなく、常に子ども発の思いや姿を大切にとらえていく。 ○子どもの心の動きをしっかりと見つけ、幼児理解していく。 ○子どもが困っている時には、原因を遡って振り返ってみる。
	トラブルのとらえ方	○トラブルが起こった時は、その場だけの捉え方ではなく前後をしっかりと見ていく。 ○子どもたちに任せるところは任す。どこでトラブルの原因になったのか、その場で判断しないよう気をつける。
	教育の質	○振り返ったり、周りの人に意見を聞いてみたりして、自分の保育している姿を見直してみる。 ○日頃から保育のあらゆる場面で素早く幼児の心に添う対応ができるように、教育の質を高めたい。
	個別の対応	○子どもの力に全て任せるのではなく、必要に応じて個別の対応をしていく。

では、幼稚園教諭は今回の研修成果を自園の教育にどのように活かそうと考えているのだろうか。表3は園の教育に活かす方法に対する回答である。幼稚園教諭は研修によって、「観察の視点」、「記録の採り方」、「子ども理解」、「トラブルのとらえ方」、「個別対応のあり方」を再認識することを通して、「教育の質」担保に活かしたいと考えている。公立幼稚園教諭が4歳未満児の保育実践を観察・記録し、それを基に園内研修で話し合うことは、自らの子ども理解、トラブル場面や個別の対応を省察させ、教育の質改善への大きな一歩を踏み出すきっかけになったと言えるのではないだろうか。

さて、こうした幼稚園教諭の学びに対し、公立・民間の保育士は公立幼稚園や保育所間の実践を通して、どのような学びを獲得したのだろうか。

## 2. 公民間の保育士による子どもの育ち・学びの共有

公民間の保育の学びを考察する前に、保育士が幼稚園の教育を観察してどのようなことを学んだのか、初年度の記録から明らかにしておきたい。

### (1) 選抜研修におけるY・Z保育士個人々々の変容

先のS・U教諭と共に公立保育所で選抜研修に参加した民間保育園2園のY・Z保育士の記録から、保育士が幼稚園において学んだことについてまとめておく。

Y保育士は初年度前半、公立幼稚園で観察した際、印象に残った場面として「サッカーボールを懸命に追いかけている姿が見られた。4歳児の女児がボールを追いかけていて、前にいた5歳児の方にボールが行ってしまい、

5歳児が思い切りボールを蹴って4歳児の足にきつく当たったが、おかまいなしにまた駆けていたので、熱中して取り組んでいるなあと感心した。何人かでボールを追いかけていき、先生に『早い、早い』と励まされると、さらにスピードアップしており、そのような声かけ一つでやる気がまた引き出されているように感じた」と、教師の言葉が子どもにもたらす意欲喚起の様子に注目している。また、かかわりが見られた場面では、「4、5歳児が一緒にしていたサッカー。3人ほどで追いかけていたボールが、最初の方はすぐに出てしまいゲームが終わっていた」ことに目を留め、異年齢の子どもの関わりをごく簡単に記している。

一方、Z保育士は前半の印象に残った場面として、「抽出児A児は、キャタピラや綱引きなど自分のしたいこと、意思はあるがうまく友達に気持ちを伝えられないのかなと思った。片付けやチャンピオンを認めてもらったことにより自信が感じられた。担任との信頼関係では、担任の声かけによって表情も変わり、行動に移すことが出来ていた。」と記している。また、かかわりが見られた場面として、「フープをバトンに見立てたりレーで友達2人とかかわっていたが、会話は先生とすることが多い。先生の声かけにより、キャタピラをしている友達のところへ行った2人を追いA児もキャタピラへ。キャタピラを自分が先頭で動かしたいようで背中合わせになる場面がよくあった。一緒にしていた子が別のキャタピラへ行き一人になる。別の子がA児のキャタピラに入ってくるが、また同じように一人に。キャタピラを止め、綱引きの綱を出そうとするが途中で諦めてしまう。他の子が綱を出し誘ってくれるが輪に入るまでに時間がかかり、最終の綱引きでやっと加わられた。」というように、A児の動きを詳細に辿りながら、表現が苦手だと判断した根拠を明らかにしていく。

後半の記録において、Y保育士は5歳児のひょうたん鬼の様子を熱中と表現の観点から次のように記している。

題名：みんなで考えよう（5歳児）

ひょうたん鬼をしたい子どもたちが集まって遊び始めていた。時間が立つに連れて、いろいろと鬼に変化が出てきて、脅かしながら追いかけてたり、歌を歌って歩いてみたり、中の子も楽しんでた。ある時、男児2人が鬼になり、ジャンプしたり、飛びついたりして友達を捕まえ始めた。子どもたちも楽しんでたが友達同士がぶつかり、教師が「あぶないね。ひょうたん鬼って飛びついて捕まえる鬼ごっこなの？」と問いかけた。「違う」と口々に子どもたちは言ったが、「誰もおかしいと言わないよ？ どっち？」ともう一度相談するように促した。すると、少し話し合い結果「飛びついて捕まえる」こととなった。教師は「とってもあぶないよ。怪我をしないように遊ぶのは難しいよ。よく考えてね」と言って遊びが再開。その後も危ない場

面が何度かあり、その度、教師が「怖いっ!」「危ない!」と声かけしていくうちに、だんだん遊びが落ち着いていき、どうすれば安全に友達にタッチできるかを考え始めた。教師の助言もあり、「はさみうちはどうかな?」という意見が出て、次に「どうやってはさみうちにしようかな?」とみんなで考え、子どもたちがいろいろ発言して「こうしよう!」と決まり、それを実践している姿が生まれてきた。

Y保育士はひょうたん鬼を記録した理由として、「一つの遊びをしていく中で、いろいろな変化を子どもたち同士で考え、飽きずにずっと体を動かしていたのが教師の声かけで、危ない遊びだと気づき、どうすれば安全に遊べるのか、自分の意見を言ったり相手の意見を聞いたりして、遊びが成立し、ルールの再確認も出来ていたのがすばらしいと思った」からと記している。このように、Y保育士は安全に遊ばせようとひょうたん鬼の捕まえ方を一方的に指示するのではなく、子どもの内面を育てる教師の言葉とはどのようなものかを実践を通して学び取っている。

これに対し、Z保育士は異年齢による遊びの中で交わされる言葉に込めた幼児の不安な気持ちを探りながら、教師の認め言葉が子どもの自信や他者理解に繋がることを見出している。

#### 題名：4歳児だけで大丈夫? (4歳児)

“おおかみさん 今何時”という遊びが4、5歳児少数人数で始まった。楽しそうな様子を見て、次々と「入れて!」と友達が増えてきた。オニだった年長児にタッチされた4歳児。それを見て同じ4歳児の子がそばへ駆け寄り、「4歳児だけで大丈夫?」と尋ねた。オニになった女兒は少し考え、「うん、大丈夫」と返し、お兄ちゃん・お姉ちゃんのマネをしてオニ役を上手にすることができた。

その後、「大丈夫?」と声をかけた女兒がオニとなり、「1人じゃできない!」と皆に言ったが遊びが始まってしまった。しかし、自分で「今何時?」のかけ声に、少し自信がなさそうに見えたが「〇時」と答え、一人で言うことができた。次第に、その子どもの表情が柔らかくなった。「お昼!」と大声で言い、タッチもできて「できたやん!!」と先生にも認めてもらい、嬉しそうにしていた。

“おおかみさん 今何時”という遊びの展開を通して、Z保育士は「自分がオニだと不安だなと思って、友達にも声をかけたのかなと、この一連の流れで気づいた。教師も友達への声かけしている姿をすかさず『〇〇ちゃん、やさしいね』と認めていて、他者の立場に立つ気持ちを日頃から大切にしているんだと感じた」という。Z保育士は子どもの表情から内面を読み取り、その読み取りが適切であったのかどうかを遊びの流れを振り返りながら考察している。後半から実施したラーニング・ストーリーによる「学びの構え」に視点を定めた記録がよりよ

い効果を導いたと考えられる。

#### (2) 園内における学びの共有

では、保育士の記録を基に話し合った園内研修での様子をそれぞれ明確にしておこう。まず、Y保育士の記録とそれを基に話し合ったI保育園の園内研修の報告書を表4にまとめておく。

#### 題名：私は料理人 (3歳児)

ままごとセットとぬいぐるみを出してもらい、それぞれが遊び始めた。台所の前に立っていた女兒は保育士に見守られながら、まな板で野菜を切っている。保育士が別のところに行っても、食べ物を切ってくっつけ、くっつけては切ることを繰り返している。ある程度切ることを楽しんだ後は、お鍋を出してきて、切ったものを入れて炒め始めた。すごく慣れた様子で作っていた。炒め終わったら、皿に盛りつける。そして最後は皿洗いと、一連の作業が流れ通りになっていて、お母さんのやることをよく見ていてすごいと思った。またその間、一言も発せず、黙々と取り組んでいる姿を見て、本当にままごとが好きなんだなあとと思った。途中、友達が入ってきて、「これ、ちょーだい」と皿に盛りつけたものを手に取ると「いいよ」と言っており、そうしたやりとりも多く見られた。

3歳児ながらも、自分の意見をしっかり言っている子が多い。例えば、「ここは違うで!」「そこにのぼったらあかんで!」等、おもちゃの取り合いになっても、子ども同士言いたいことを言い合って解決したり、保育士に言いに行き解決している様子もあった。保育士が仲裁に入ることにより、1つ1つ解決して行きながら、心も成長していくのだと思った。

Y保育士の記録は、「一人の子どもに焦点を当ててエピソード記録を書くことで、その子どもの心の動きや成長をより深く理解出来るということを学んだ。」「子ども一人をよく観ると今まで気づかなかったことなどが見えてくる。」という保育士がいる一方で、「子どもの遊んでいる姿がしっかりと観察されているが、“何を感じて、何を思って子どもは遊んでいるのだろうか”などの記録があればもっと良かったかなと思う。」という指摘がある。確かにY保育士は3歳児女兒の手慣れた料理や、友達と交わす言葉に引き込まれた様だが、何を思って遊んでいるのか記録からはわからない。また、保育士の言葉かけや周りの状況が見えないといった指摘もある。つまり、「保育士が仲裁に入ることにより、1つ1つ解決していきながら、心も成長していくのだと思った。」と締めくくられているが、保育士がどのような言葉で仲裁に入り、トラブルがどのように1つ1つ解決していくのか、その過程は見えない。したがって、研修を通して学んだこととして、「言葉かけや周りの状況」が見えるようにするには、保育士の支援を明確に記録することが必要だと気づいたという。

また、研修のあり方として「他園で研修したものを持ち帰って園内研修をしたところで、どのように発言して良いものか戸惑った。」「エピソード記述の書き方の研修であれば、他園に行った先生のエピソードを持ち帰って話を聞いてもわかりにくく園内研修を進めにくかった。」といった感想を漏らしている。さらに、「他園の子どもについての記録でイメージしにくかった」という意見がある一方、「他の保育士の意見も聞いて良かった」という感想もある。選抜研修の目的はどのような視点から記録をまとめ、他者が読んでもイメージしやすいものにするのかということと、それを基に意見を交わすことにある。それゆえ、記録に関わる感想が研修において多かったことは頷ける。そして、どのような意見が交わされたのかは別として、「意見が聞いて良かった」という感想は非常に重要である。

表4 選抜研修を踏まえた園内研修（1 保育園）

特徴語	記述内容
言葉かけや周りの状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>○幼児の外面的行動・あらまは読んでほしい想像がつくが保育士の言葉かけや周りの状況などで幼児がどう変化していったのかの記入があればより分かりやすく、イメージしやすい。</li> <li>○記録を書く際、その場に一緒にいる保育士が子どもにどのような声かけや働きかけをしているのか、聞き手にイメージしやすいように書いていくことが必要だと思った。</li> <li>○保育者と子ども達の会話などが書いてあるとより状況がイメージしやすいので良かったと思う。</li> <li>○幼児の外面的な行動を書いてしまいがちだが、周りの環境であったり、保育士のどういった行動・言葉のかけ方などによって、幼児の行動が変化していったのかなどが書いてあるとよりわかりやすいものになる。</li> </ul>
学んだこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>○聞き手に分かりやすいような記録にするため、観察している子どもの動き、様子などをより詳しく書くことが大切だと思った。</li> <li>○子ども達の遊んでいる場面が想像できるような記録の書き方で、見ていない私にもその場面が伝わってきた。私は簡潔にし過ぎてしまうところがあるので、もっと具体的に書くように心がけたいと思った。</li> <li>○一人の子どもに焦点を当ててエピソード記録を書くことで、その子どもの心の動きや成長をより深く理解出来るということ学んだ。</li> <li>○相手が見ていない状況をよりわかりやすく想像できるようにするには、簡潔に伝えつつ、しかし伝えたいことを詳しく説明しないとけないと思った。</li> </ul>
子どもの心の動き	<ul style="list-style-type: none"> <li>○子ども一人をよく観ると今まで気づかなかったことなどが見えてくる。</li> <li>○子どもの遊んでいる姿がしっかりと観察されているが、「何を感じて、何を思って子どもは遊んでいるのだろう」などの記録があればもっと良かったかなと思う。</li> </ul>
園内研修のあり方	<ul style="list-style-type: none"> <li>○同じ場所において共有してのエピソード記述だと思っので、他園で研修したものを持ち帰って園内研修をしたところで、どのように発言して良いものか戸惑った。</li> <li>○エピソード記述の書き方の研修であれば、他園に行った先生のエピソードを持ち帰って話を聞いてもわかりにくく園内研修を進めにくかった。</li> <li>○研修の目的や意図をより明確にし、詳しい説明があればより実りのある研修になったと思う。</li> </ul>
イメージしにくい記録	<ul style="list-style-type: none"> <li>○他園の子どもについての記録だったのでイメージしにくかった。</li> <li>○他園の子どもエピソードだったので進めにくかったが、他の保育士の意見も聞いて良かった。</li> </ul>
記録への感想	<ul style="list-style-type: none"> <li>○なぜこのエピソードを描きたいのかの理由が必要で自分の思いを他の保育士にわかってもらいたいと思って書く。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>○読み手が読んで、その出来事のあらましが目に浮かぶように描くことが大切。</li> <li>○自分の記録を発表し、様々な改善点や感想が聞けてとてもよい機会になった。</li> <li>○普段沢山の子どもたちを観ていて、気づかないことなど沢山あるが、こうした記録などを見ると他の人の意見なども聞くことができるとも良いと思った。</li> <li>○遊んでいる場面はよく伝わってきたが、保育士との関わりが書かれていなかったの、そういうところも書いていた方がもっとよいと思う。</li> <li>○文章が長いとより詳しく伝わると思うが、聞いている側はしんどくなりわからなくなってしまう。より簡潔に書きつつ詳しく内容が伝わる文章が書けるようになりたい。直接「ここをこうしたら良かった」などの声が聞けて、私自身成長できるものとなった。</li> </ul>
記録の必要性	<ul style="list-style-type: none"> <li>○エピソード記述の大切さを改めて学ぶことが出来ました。園内でも今後の園内研修に取り入れていきたい。</li> <li>○園内でもこのような取り組みを取り入れて、記録を採る機会を増やせればと思う。</li> <li>○記録の書き方の研修であれば、各園で研修を行い、保育者全体が子どもを理解した上で記録を採り、話し合った方がイメージしやすく書き方についても学べると思う。</li> </ul>
今後の教育・保育に活かす方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>○記録を通して保育士達が、子どもの興味・関心のあることや熱中して取り組んでいること等の情報を共有したり、子ども一人ひとりへの理解を深めて行けたらと思う。</li> <li>○気になる子やより理解を深めたい子どもについてのエピソード記録を書き、他の保育士とも共有することで、周りの意見を取り入れながら、その子どもについて理解を深めていくことが出来るのではないかなと思う。</li> <li>○普段はなかなかこういった場で話すこともなく、他の先生方の意見などを聞く機会がないので良いと思った。</li> <li>○子どもたちに考える力や学び合う力を育てたいと思うことは、保育士自身が考え、学んでいく事から始まると思う。園内研修にかかわらず、日々の保育の中でもオープンに話し合い、子どもと共に学んでいく姿勢を持ち続けたい。</li> <li>○エピソード記述を普段の保育で採ることはなかったが、面白い場面や気になった場面があれば自分なりにまとめ、他の保育士と共有、共感し合うことができればいいと思う。</li> </ul>

保育士たちは研修を通して、記録をわかりやすくするには「その出来事のあらましが目に浮かぶように描くこと」「保育士との関わりを書くこと」「簡潔に書きつつ詳しく内容が伝わる文章であること」が重要だと感じ取っている。

今後の教育・保育への活かし方として、他園の記録でイメージしにくいと指摘した保育士も自園で記録を採り、話し合うことの必要性は認識しており、記録を採る機会を増やし園内研修に取り入れていきたいと希望している。記録が子ども理解にとって不可欠だと認識した保育士もいる。特に、気になる子やより理解を深めたい子どもについての記録を他の保育士と共有することで、その子どもについての理解を深めて行けるのではないかとまで期待を寄せている。希望・期待が膨らむように、園内研修の成果は「普段はなかなかこういった場で話すこともなく、他の先生方の意見など聞く機会がないので良いと思った」「他の保育士と共有、共感し合うことができればいいと思う」という保育士の言葉に集約される。互いに学び合う場が設けられたことで、保育士間の理解が少しは深まったのではないかと考えられる。「子どもたちに考える力や学び合う力を育てたいと思うことは、保育士自

身が考え、学び合う事から始まると思う。園内研修にかかわらず、日々の保育の中でもオープンに話し合い、子どもと共に学んでいく姿勢を持ち続けたい」という保育士の願いを実現させ、学び続ける必要がある。そして、独りよがりな見方を反省し、実践をさまざまな観点から吟味する柔軟性と多様性を身に付けて欲しい。

(3) 研修の学びの共有から保育の質改善へ

続いて、Z保育士の記録とそれを基にしたE保育園の園内研修の実際を表5から詳しく見ておこう。Z保育士は「赤ちゃん」と題して、3歳児3名のかかわりをA児を中心に描いている。Z保育士はA児が何枚もハンカチ

題目：赤ちゃん（3歳児）  
ぬいぐるみを2体、座布団に寝かせ、大切そうにハンカチを掛け布団に見たてながら10枚程かけて遊んでいたA児。ハンカチを掛け終わると、急に立ち上がり、ぬいぐるみ2体を布団ごと持ち上げて、後ろで遊んでいたB児とC児のいるおままごとの机に向かって歩いて行った。A児は「ドンッ」とぬいぐるみを机の上に置いた。B児とC児は「自分たちの場所を取られた」と思って怒るのかな？と私は様子を見ていた。B児とC児は布団に寝ているぬいぐるみを「赤ちゃん？」と尋ねた。A児は嬉しそうに微笑んだ。B児とC児はA児の顔を見て、「赤ちゃん」と分かったようで、B児が「赤ちゃんにご飯あげなあかんあ」と食べ物を傍らに置いた。その後、A児がぬいぐるみを寝かせるように体をトントンし始めると、B児も同じようにトントンを始めた。「力強く叩いているなあ」と気になって見ていた。トントンする2人を見ていたC児が「赤ちゃん、泣いてまうやん！！」と強さに気づき、声をかけた。そこで、A児とB児は「ハッ」と気づいたような表情になり、2人してトントンする手を緩めた。  
その後、この“赤ちゃん”に関わることは、観察時間内には見られなかったが、見ている間は動かすこともなかったので大切にしているように感じた。

をぬいぐるみにかけて遊んでいる様子に、思いを馳せる。それゆえ、突然ぬいぐるみを布団ごと持ち上げてB、C2人のいるおままごとの机の上に置くのが気になる。B、Cが怒るのかと思って見ていると、その想像はまったくはずれて、2人はすぐに「赤ちゃん」だと理解した。それはこうしたやりとりが何度となく行われているからではないかと考えられるが、Z保育士の記録はそうした読み取りが可能なものとなっている。

E保育園では、この記録を合同研修で示した4つの指標<sup>6)</sup>、①観察できる幼児の外面的行動、②保育者がとった外面的行動、③保育者の心に映った幼児の心の状態、④保育者の考えたこと感じたこと、から分析した上で研修に臨んだことが報告書からわかる。この分析から研修を通して学んだことは、①観察の視点と記録の指標、②子どもの課題と保育者の支援、③子ども理解、という3点に分類された。保育士たちは、観察の視点を明確にし

た記録を指標に基づいて整理することで、その場に居なかった保育士もその場面や子どもの姿が分かりやすいということを学んでいる。しかも、記録から子どもの思いや考えが見えてくるとともに、保育者の対応や関わりを振り返り、子どもの課題に向けた保育者の支援が検討できると考えている。そして、それは言うまでもなく、子ども理解を深めることに繋がっていく。

表5 選抜研修を踏まえた園内研修（E保育園）

特徴語	記述内容
5つの視点と4つの指標	<ul style="list-style-type: none"> <li>○5つの視点を持って記録を採る。どの視点に絞ったのかを明確にすると読み手がイメージしやすい。</li> <li>○ただ見たままの様子を記録するのではなく、保育者として感じ取ったことや思いも含めて記録する大切さを感じた。5つの視点を踏まえ観察する大切さ、難しさを知ることができた。</li> <li>○記録は5つの視点に絞ると採りやすく、聞き手もイメージしやすい。読んで理解出来ない、子どもの行動やその時の保育者の行動（関わり方）が分からない。</li> <li>○記録の文章を4つの指標に分けてみることで、どの部分が幼児の外面的行動で、幼児の心の状態なのか、保育者は幼児に対してどう考えているのか、ということが見えてきました。4つの指標に重点を置いて記録をとると場面がイメージしやすいと学びました。</li> <li>○5つの視点に絞って、子どもたちの関わりや遊びの様子を見ることで、子どもたちが何に興味・関心を持っていたのか、何に熱心に取り組んでいたのかが見えやすくなっていく。</li> <li>○保育記録の4つの指標を合同研修で耳から聞くよりも、実際の記録から討議して読み取っていくことで、具体的に分かりやすく記録の採り方が学べた。</li> <li>○保育記録の4つの指標で文章を分けてみることで、書いた保育者も事例を整理して振り返ることが出来、またその場に居なかった保育者も場面や子どもの姿が分かりやすいのだと改めて学んだ。</li> </ul>
学んだこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>○子どもの行動の中には思いがある。見ている先生がどうとらえるかが大切。そこをはっきり記録することで、その子どもの課題が見えてきて、次の支援へと繋がる。</li> <li>○子どもたちの行動だけを記すのではなく、その時保育者が子どもの行動をどう捉えたかを明確にすることで、今後の支援や課題に繋がる。</li> <li>○記録を指標から見ていったとき、保育者がとった外面的行動がない/少ないことがわかった。これは保育者が子ども同士のかかわりを見守っていることを表しており、5つの視点を持って子どもの行動を見ることで、子どもが遊ぶ情景までも明確に記録し、課題へと繋がられるのだということも学んだ。</li> <li>○保育記録とは子どもの行動の記録であることから、保育者の勝手な思い込みを絶対せず、具体的な行動やかかわりを記録することの大切さを学んだ。</li> <li>○4つの指標をもとに記録を採ることで、その時の情景やいろいろな思いが見えてきたり、保育者の対応・関わりも振り返ることが出来る。その意味で記録が大切なんだと気づいた。</li> </ul>
子ども理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>○子どもたちの行動には、それぞれ意味や思いがあり、それを理解するために記録が大切である。</li> <li>○読み手がイメージしやすいように記録を採ることで、子どもの心の動きや考えが見えやすくなり、それを保育者が想像することで子ども理解に繋がる。</li> <li>○子どもの行動には思いがある。思いがあるからぶつかる。相手の違った観点からみてこの子はこう思い、こっちが欲しいというのを見るときなぜトラブルが起きているのかが見やすい。</li> </ul>
感想	<ul style="list-style-type: none"> <li>○4つの指標の1つである保育者の心に映った子どもの心の状態が書き込まれていないと記録を採った理由が伝わらない。</li> <li>○自らの記録の採り方を見直す機会になった。使う言葉の選択、文を区切るところひとつで、伝わり方が違ってくることもあり、記録を採る難しさも感じた。</li> <li>○指標について考えながら読むと、子どもの内面や観察している側の考え・感じ方が見えてきます。記録をここまで詳しく見る機会は今までなかったので勉強</li> </ul>

	<p>強になりました。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○他者が情景をイメージしやすく、また子どもの思いが見えてくるかなど、記録の書き方や記録を採る上で必要なことが分かったような気がする。</li> <li>○記録を読みながら、ある一文に対して疑問に思ったりする部分があったので、その部分自体も書く必要があるのだと思いました。</li> <li>○第三者が読んで子どもの姿や背景のイメージが浮かぶような記録を書くには日頃から意識して書かないといけないと感じました。</li> <li>○幼児の外面的行動と保育者の心に映った幼児の心の状態を見分けるのが難しかったです。「満足そうにして」や「得意げに」など、幼児の行動でもあるが、保育者の心に映った心の状態でもあるので、自分が記録を書くときに注意して書きたい。</li> </ul>
園内研修での意見交換	<ul style="list-style-type: none"> <li>○全然知らない保育園の子どものことで多くの意見が出るということは、私たちが普段関わっている子どもとなるとも多くの意見が出るのだろうと思った。とても良い話し合いができたと思うので、今後も職員全員で話し合う場を設け、子どもたちのためになる保育に繋げたい。</li> <li>○初めての園内研修で自分が思ったこと疑問に思ったこと他に、先生方の意見を聞くことでそういうことだったのだ、そういう視点もあるんだと学ぶことが出来た。</li> </ul>
保育への省察	<ul style="list-style-type: none"> <li>○保育者はつい先走って言葉をかけてしまいがちだったりするが、子ども同士のやりとりを最後まで見守ることが大切であると思った。</li> <li>○何かトラブルになった時、つい仲介に入ろうとしてしまいがちだが、子どもの行動から思いを読み解き、見守ったり、そのトラブルが起こった原因を双方の思いから見ていくことが大切だと思った。</li> <li>○対象児が3歳児で今の私が担任しているクラスの子どもと重なって想像することが出来、とても面白かった。</li> <li>○記録から課題や支援を明確に出来るような記録を採れるようにしていきたいと思った。</li> </ul>
保育・子どもの共通理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>○集団の中で個々をしっかりと観察することで、その子一人ひとりの課題が見えてくる。複数担任も多いので、それぞれの先生の捉え方を共通理解し、同じ方向性で子どもたちの成長を支援していきたい。</li> <li>○複数担任であるため保育者同士の共通理解が必要であるが、子どものイメージを大切に、あそびを広げていく。</li> <li>○園内で話し合うことで、自分では気づけなかった子どもの思いに気づくことが出来、援助の幅が広がるように感じた。</li> <li>○記録を採ることで、他者に具体的に伝えることが出来て、保育者の考えや感じたことも記録することで、他者との話し合いも深まり、より子どもの共通理解に活かせ、保育の質も高まるのではないかと思います。</li> <li>○保育者同士でも意見交換しながら、保育を進めて行けたらいいなと思います。</li> </ul>
今後の教育・保育に活かす方法	<p>記録の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○日々の保育の中で5つの視点を踏まえて、保育日誌などの記録に活かしていきたい。</li> <li>○普段の日誌内の子どもの記録は、子どもの外面的行動、保育者の考えたことが主で、子どもの内面にまで踏み込めていなかったと思います。もう一度記録を見直そうと思いました。記録で子どもの課題、また保育者の援助・言葉のかけ方はどうだったかなど、多くのことが見えてくるので記録をつけていきたい。</li> <li>○普段から気になるような事例があれば少しの文章でも書き留めて記録を採るように心がけ、書く練習をしようと思います。</li> </ul> <p>保育の見直し</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○クラスの中で友達とのトラブルが多い子どもがいる。その子どもを観察し、記録を採ることでトラブルになるきっかけや子どもの思い、また周りの子どもの思いに気づくことが出来、トラブルを未然に防ぐことができるのではないかと思います。</li> <li>○記録を採り、それを改めてみんなで見ていくことで、子どもへの理解を深めることができ、次の課題や支援を考える重要な資料になることがわかった。日々の保育の中で子どもの行動・言葉により耳を傾け、子どもへの理解を深めると共に、子どもが自分の思いと自分で表現する場を大切にしていきたい。</li> <li>○記録から日頃の保育を振り返り、その振り返りで分かったこと、気づいたことを次の保育に活かしていきたい。</li> <li>○保育者が介入するのではなく見守りながら、子ども一人一人の言葉の奥にある思いを考えることがとて</li> </ul>

	<p>も大切だと感じました。せかせかした保育の中ではつい忘れがちになってしまうが、その思いを考えながら待つ気持ちを持って保育に取り組みたい。</p>
--	--

また、E保育園では研修から①記録の意味や採り方、②研修での意見交換、③保育への省察、にかかわる感想が上げられている。とりわけ、記録を4つの指標で分析したことから、記録への強い関心が漏らされており、それが今後もこうした園内研修を進めたいといった積極的な評価や自らの保育に対する省察へと繋がっている。その証拠に、今後の教育・保育に活かす方法として、感想に上げられた記述が具体化されている。

①の「記録の意味や採り方」は「記録の充実」として活かされていく。視点を踏まえた観察を心がけ、普段の日誌の記録改善に活かしたり、気になる事例を記録に採って書き方の練習を行いたいという。特に注目されるのが、「普段の日誌内の子どもの記録は、子どもの外面的行動、保育者の考えたことが主で、子どもの内面にまで踏み込めていなかったと思います。もう一度記録を見直そうと思いました。記録で子どもの課題、また保育者の援助・言葉のかけ方はどうだったかなど、多くのことが見えてくるので記録をつけていきたい。」という記述である。つまり、保育士たちは研修を通して子どもの内面にまで踏み込んだ記録こそが子どもの課題を明らかにし、保育者の援助を適切なものにする唯一の方法だと認識したと言えよう。

次に、②の「園内研修での意見交換」は保育士間の「保育・子どもの共通理解」に繋がり、自分一人では気づけなかった子どもの思いに添った保育ができる素地を固め、保育の質向上への期待を膨らませるものになっている。そして、③の「保育への省察」はそのまま「保育の見直し」へと具体化される。例えば、「記録から日頃の保育を振り返り、その振り返りで分かったこと、気づいたことを次の保育に活かしていきたい。」「保育者が介入するのではなく見守りながら、子ども一人一人の言葉の奥にある思いを考えることがとても大切だと感じました。せかせかした保育の中ではつい忘れがちになってしまうが、その思いを考えながら待つ気持ちを持って保育に取り組みたい。」など、急かす保育から待ちの保育への見直しである。

### おわりに

公立保育所における選抜研修に参加した保育者らが採取した保育記録は公立幼稚園1園、民間保育園2園で実施された園内研修に多くの成果を残した。幼稚園教諭と保育所保育士合同の交流研修において実施した選抜研修は保育者個々人のみならず、園内研修における話し合いに次のような学びを拡大する契機となった。

合同の交流研修を通して指導したラーニング・ストー

リーによる記録の採集は保育者に、子どもが熱中・挑戦する姿とそれを支援する保育者の関わり方を省察させ、子どもへの共感的まなざしをもたらした。選抜研修で採取した保育記録は園内研修を通して、幼稚園教諭のみならず、保育所保育士たちに次の2点を確認させた。①保育者の関わりと子どもの活動の一連の流れ、その過程における成果をつぶさに採取することの必要性、②保育者間の学び合いが子ども理解の共有と保育の質を保証する保育者の成長を生み出す契機となることの認識、の2点が研修を通して園内に浸透した。

本稿は選抜研修が保育者個人や園の保育者にもたらした学びの広がりの一部にすぎない。想像していた以上の成果が、記録への意識の高まりにあった。実践に活用しやすい記録の採取法を今後も検討していく必要がある。

### 注

- 1) 「保育者のための自己評価チェックリスト」編集委員会、『保育者のための自己評価チェックリスト：保育者の専門性の向上と園内研修の充実のために』萌文書林、2015年。
- 2) Carr, M. *Assessment in Early Childhood Settings: Learning Stories*, SAGE Publications, 2001, pp.22-25. マーガレット・カー著、大宮勇雄・鈴木佐喜子訳『保育の場で子どもの学びをアセスメントする：「学びの物語」アプローチの理論と実践』ひとなる書房、2013年、50-53頁。拙稿「保育における評価としてのラーニング・ストーリー—ラーニング・ストーリーに見る子どもの心の動きと保育者の子ども理解—」『兵庫教育大学研究紀要』第46巻、2015年、11-20頁。
- 3) 保育・子育て総合研究機構研究企画委員会「【改訂版】保育における『子どもの育ちと学びの分かち合い』への招き」全国私立保育園連盟、2012年。
- 4) 佐伯胖「学び合う保育者：チーム保育における保育者の成長と学び」『発達』21巻83号、ミネルヴァ書房、2000年、44頁。
- 5) 同上、44-45頁。
- 6) 小川博久編著『保育実践に学ぶ』建帛社、1988年、277-278頁。